# 女々しき男たち

Junko Higasa

先ごろ「男たちが女々しくなった」という統計が某所で発表された。特に恋愛関係において「別れないでくれ～」と女性にすがる男が増えているという。そして男同士の社会においても女々しく陰湿な戦いが繰り広げられる。男はどうしてここまで自信を失くしてしまったのだろう。それは「男が男になれなくなった」からだと思う。

そもそも「男」とはどういうものであったか？それについては小森陽一教授の夏目漱石『吾輩は猫である』講義から学んだ明治時代の「文明病」の説明が判断の役に立っている。ここでこういう断り書きを入れるのは、文書から得た知識は「誰々の説」と断れるが、話では他人から得た知識を咀嚼してしまうと、それがあたかも最初から自分の頭にあった考えのように述べられることが往々にしてあるからである。そのため聞いた話はすでに自分の見解に組み入れられてしまっていると断っておく。

そこで「男の女々しさ」であるが、明治時代の日露戦争を経て急速に西洋化した日本社会では、家の奥に引っ込んでいた女性が社会に出現するようになった。それまで世間一般の女性の地位は低く、貧しいところでは物同様に売り買いされることもあった。結婚は父親が決め、嫁いでからは夫に従うのが当然の世の中だった。しかし日露戦争後の日本は優秀な男を育てるために母親になる女性の教育にも目覚め始めた。それまでの女性は男性に従う自分の役割の中で人間性を高めていったのであるが、社会に出没し始めた女性は本来備わった色香に加えて、にわか仕込みの「学問」で男を「翻弄できる」ようになった。最も徳川時代の大奥を見れば、本来自由がきく女はすでにその素養を持ち合わせていた。したがって日本の「強い男を育てる」目的が皮肉にも真逆の結果をもたらすパンドラの箱を開けてしまったのである。男同士の結束は敗れ、女が介入する社会が生まれた。漱石は戦争によって「男になれる男」が失われ、西洋文明の模倣によって物質的に発達する世の中で、人より優位に立とうとして不当な手段を使って同類を蹴落とす男たちの「人間性の堕落」を嘆き、より良い伴侶を求めようとして女性にうち負かされる男の軟弱化を嘆いたのである。このままいけば日本はダメになる。それが今 21 世紀の男の軟弱化の起源であろう。「女の人生男次第」から「男の人生女次第」へと変転する。男社会で「男であること」に安住できた男たちが、自由恋愛の解禁によって競争を余儀なくされ「自分」を見失う危険性が生まれた。

さて、そのように女性が社会で認められ始めたとはいえ、まだ職業的に男性と同等になるには及ばず、女性の生活は相変わらず男性に委ねられたままだった。その女性の社会的苦悩は『三四郎』の里見美禰子に現れる。そして『虞美人草』で甲野藤尾の天秤にかけられる。そしてこの女性の社会的地位はおそらく昭和 50 年代まで続く。その間、男性の女性獲得はまだ安泰であった。いや、今だって安泰である、自立できる男には。つまり「女々しい男」とは、漱石の言う「男になれない男」なのである。

自分の意思で「戦う男」と「戦わない男」はそれぞれ自分に見合った人生を手に入れる。彼らはいざという時、力の大小にかかわらず精神的に「男」になれる。けれど文明の「便利」に浸かり切った「戦えない男」は男どころか自分にさえなれない。その「女々しき男たち」は女の「本能的愛の基準」をクリアできないだろう。(2012.8.18)